

本日よりこと

- 1 Laplace 変換の微分方程式の解法への応用
 - 定数係数連立一階線形常微分方程式
 - 一般理論
 - A が 1 次独立な n 個の固有ベクトルを持つ場合

Laplace 変換の微分方程式の解法への応用

定数係数連立一階線形常微分方程式

復習：定数係数連立一階線形常微分方程式の初期値問題 解法の一般理論

定数係数連立一階線形常微分方程式の初期値問題

$a_{11}, a_{12}, a_{21}, a_{22}, c_1, c_2$: 定数, $x(t), y(t)$: 未知関数, $f(t), g(t)$: 既知関数のとき,

$$\begin{cases} x'(t) = a_{11} x(t) + a_{12} y(t) + f(t), & x(0) = c_1, \\ y'(t) = a_{21} x(t) + a_{22} y(t) + g(t), & y(0) = c_2 \end{cases} \quad (P)$$

を **定数係数連立一階線形常微分方程式の初期値問題** という。

(P) をベクトル関数を用いて単独方程式に書き直し、通常関数の初期値問題と同様にラプラス変換を用いて解く。

Laplace 変換の微分方程式の解法への応用

定数係数連立一階線形常微分方程式

$$\vec{y}(t) = \begin{pmatrix} x(t) \\ y(t) \end{pmatrix}, \quad \vec{f}(t) = \begin{pmatrix} f(t) \\ g(t) \end{pmatrix}, \quad \vec{c} = \begin{pmatrix} c_1 \\ c_2 \end{pmatrix},$$
$$\mathbf{A} = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{pmatrix}, \quad \mathbf{I} = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

と定め、ベクトル関数 \vec{y} の導 (ベクトル) 関数を

$$\vec{y}'(t) = \begin{pmatrix} x'(t) \\ y'(t) \end{pmatrix}$$

と定めると (P) は

$$\vec{y}'(t) = \mathbf{A}\vec{y}(t) + \vec{f}(t), \quad \vec{y}(0) = \vec{c} \quad (P')$$

となる.

Laplace 変換の微分方程式の解法への応用

ベクトル関数・行列関数のラプラス変換

ベクトル関数・行列関数のラプラス変換の定義

$$\text{行列関数 } \mathbf{V}(t) = \begin{bmatrix} v_{11}(t) & v_{12}(t) \\ v_{21}(t) & v_{22}(t) \end{bmatrix}, \quad \text{ベクトル関数 } \vec{v}(t) = \begin{bmatrix} v_1(t) \\ v_2(t) \end{bmatrix}$$

の Laplace 変換 $L[\mathbf{V}](s)$, $L[\vec{v}](s)$ を

$$L[\mathbf{V}](s) = \begin{bmatrix} L[v_{11}](s) & L[v_{12}](s) \\ L[v_{21}](s) & L[v_{22}](s) \end{bmatrix}, \quad L[\vec{v}](s) = \begin{bmatrix} L[v_1](s) \\ L[v_2](s) \end{bmatrix},$$

で定める。要するに成分ごとに Laplace 変換するものと定めるわけである。
Laplace 逆変換も同様に定める。

通常関数のラプラス変換と同様に線形法則、微分法則、合成法則が成り立つ。

Laplace 変換の微分方程式の解法への応用

定数係数連立一階線形常微分方程式

復習の復習：1階単独の場合 $\begin{cases} y' = ay + f(t), \\ y(0) = c. \end{cases}$ の解法.

両辺ラプラス変換して微分法則を使い $L(y) = Y, L(f) = F$ とおくと

$$(s - a)Y = c + F(s)$$

両辺 $s - a$ でわって

$$Y = \frac{c}{s - a} + \frac{1}{s - a} \times F(s)$$

両辺逆ラプラス変換して合成法則を使うと

$$y = L^{-1} \left(\frac{c}{s - a} \right) + L^{-1} \left(\frac{1}{s - a} \times F(s) \right) = ce^{at} + (e^{at} * f(t)) \cdots (\star)$$

Laplace 変換の微分方程式の解法への応用

定数係数連立一階線形常微分方程式

同様の方法で (P') $\begin{cases} \vec{y}'(t) = \mathbf{A}\vec{y}(t) + \vec{f}(t), \\ \vec{y}(0) = \vec{c}. \end{cases}$ を解こう.

両辺ラプラス変換して 微分法則を使い $L(\vec{y}) = \vec{Y}$, $L(\vec{f}) = \mathbf{F}$ とおくと

$$(s\mathbf{I} - \mathbf{A})\vec{Y} = \vec{c} + \mathbf{F}(s)$$

両辺に $(s\mathbf{I} - \mathbf{A})^{-1}$ をかけて

$$\vec{Y} = (s\mathbf{I} - \mathbf{A})^{-1}\vec{c} + (s\mathbf{I} - \mathbf{A})^{-1}\mathbf{F}(s)$$

両辺逆ラプラス変換して合成法則を使うと

$$\begin{aligned} \vec{y} &= L^{-1}((s\mathbf{I} - \mathbf{A})^{-1})\vec{c} + L^{-1}((s\mathbf{I} - \mathbf{A})^{-1}\mathbf{F}(s)) \\ &= L^{-1}((s\mathbf{I} - \mathbf{A})^{-1})\vec{c} + L^{-1}((s\mathbf{I} - \mathbf{A})^{-1}) * L^{-1}(\mathbf{F}(s)) \cdots (\star 2) \end{aligned}$$

Laplace 変換の微分方程式の解法への応用

定数係数連立一階線形常微分方程式

(*)、(*)2) を比較して

$$L^{-1}((s\mathbf{I} - \mathbf{A})^{-1}) = e^{t\mathbf{A}}$$

と書くことにする。

定理：定数係数連立一階線形常微分方程式のラプラス変換による解法

(P') の解は

$$\vec{y}(t) = e^{t\mathbf{A}}\vec{c} + e^{t\mathbf{A}} * \vec{f}(t)$$

と書ける。

積分で書くと $e^{t\mathbf{A}} * \vec{f}(t) = \int_0^t e^{(t-\sigma)\mathbf{A}} \vec{f}(\sigma) d\sigma$ ただしベクトル関数の積分は $\int \begin{pmatrix} v_1(t) \\ v_2(t) \end{pmatrix} dt = \begin{pmatrix} \int v_1(t) dt \\ \int v_2(t) dt \end{pmatrix}$ と考える。

Laplace 変換の微分方程式の解法への応用

定数係数連立一階線形常微分方程式

1. 未知関数 n 個, 方程式 n 個の場合も同様のことが成り立つ。
2. 「係数行列 A がちょうど未知関数と同じ数の, 一次独立な固有ベクトルを持つ」場合には, もう少し見やすくなる。

Laplace 変換の微分方程式の解法への応用

連立一階方程式: A が 1 次独立な n 個の固有ベクトルを持つ場合

復習: 行列の固有値・固有ベクトル

A : 実数成分の n 次正方行列

λ : 複素数

u : n 次列ベクトル

に対して

$$Au = \lambda u, \quad u \neq 0$$

のとき, λ を A の固有値, u を λ に対する A の固有ベクトルという。

A が実数成分であっても λ が複素数になることがある。そのときは u の成分も複素数になる。

Laplace 変換の微分方程式の解法への応用

連立一階方程式: A が 1 次独立な n 個の固有ベクトルを持つ場合

復習: 固有方程式

固有値 λ は固有方程式

$$|A - \lambda I| = 0, \quad (I \text{ は単位行列})$$

の解である。

Laplace 変換の微分方程式の解法への応用

連立一階方程式: A が 1 次独立な n 個の固有ベクトルを持つ場合

復習: 行列の対角化

A が 1 次独立な n 個の固有ベクトル $\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n$ を持つ場合, 対応する固有値を $\lambda_1, \dots, \lambda_n$ とし

$$P = (\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n)$$

とおくと P は正則行列となり

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & \lambda_2 & \cdots & 0 \\ \vdots & & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & \lambda_n \end{pmatrix}$$

これを行列 A の**対角化**という。

Laplace 変換の微分方程式の解法への応用

連立一階方程式: A が 1 次独立な n 個の固有ベクトルを持つ場合

A が 1 次独立な n 個の固有ベクトルを持つ場合は, 状態推移行列 e^{tA} が著しく見やすくなる. $n = 2$ で説明する.

1 次独立な n 個の固有ベクトルを持つ場合の状態推移行列

$$\mathbf{u} = \begin{pmatrix} u_1 \\ u_2 \end{pmatrix}, \mathbf{v} = \begin{pmatrix} v_1 \\ v_2 \end{pmatrix} : A \text{ の固有ベクトル}$$

λ, μ : 対応する固有値

とし $\{\mathbf{u}, \mathbf{v}\}$ は 1 次独立であるとする. この時状態推移行列 e^{tA} は

$$e^{tA} = \begin{pmatrix} u_1 & v_1 \\ u_2 & v_2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} e^{\lambda t} & 0 \\ 0 & e^{\mu t} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} u_1 & v_1 \\ u_2 & v_2 \end{pmatrix}^{-1}$$

となる.

Laplace 変換の微分方程式の解法への応用

連立一階方程式: A が 1 次独立な n 個の固有ベクトルを持つ場合

[確かめ] $P = \begin{pmatrix} u_1 & v_1 \\ u_2 & v_2 \end{pmatrix}$ とおき A の対角化を使うと $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \lambda & 0 \\ 0 & \mu \end{pmatrix}$.

左から P , 右から P^{-1} をかけると

$$A = P \begin{pmatrix} \lambda & 0 \\ 0 & \mu \end{pmatrix} P^{-1}$$

したがって

$$sI - A = P \begin{pmatrix} s & 0 \\ 0 & s \end{pmatrix} P^{-1} - P \begin{pmatrix} \lambda & 0 \\ 0 & \mu \end{pmatrix} P^{-1} = P \begin{pmatrix} s - \lambda & 0 \\ 0 & s - \mu \end{pmatrix} P^{-1}$$

 $(AB)^{-1} = B^{-1}A^{-1}$ を使って

$$(sI - A)^{-1} = P \begin{pmatrix} s - \lambda & 0 \\ 0 & s - \mu \end{pmatrix}^{-1} P^{-1} = P \begin{pmatrix} \frac{1}{s - \lambda} & 0 \\ 0 & \frac{1}{s - \mu} \end{pmatrix} P^{-1}$$

Laplace 変換の微分方程式の解法への応用

連立一階方程式: A が 1 次独立な n 個の固有ベクトルを持つ場合

$$\begin{aligned} e^{t\mathbf{A}} &= L^{-1} \left((s\mathbf{I} - \mathbf{A})^{-1} \right) = \mathbf{P} \begin{pmatrix} L^{-1} \left(\frac{1}{s-\lambda} \right) & 0 \\ 0 & L^{-1} \left(\frac{1}{s-\mu} \right) \end{pmatrix} \mathbf{P}^{-1} \\ &= \mathbf{P} \begin{pmatrix} e^{t\lambda} & 0 \\ 0 & e^{t\mu} \end{pmatrix} \mathbf{P}^{-1} \end{aligned}$$